

行う自動化機能を新たに追加。数百件から数千件程度のデータ処理がクライアント側からも可能となった。

データの入力に要する時間の短縮と正確かつ迅速なデータ入力のために工夫をこらし、例えば、ロシア語や北欧諸語、タイ・ベトナム語等キリル文字やEXC文字と呼ばれる音標符号付文字を使用する書誌データの編集においては、ソフトキーボード（ソフトウェアにより仮想的に複数の鍵盤を扱えるようにしたもの）を用いて、英独仏語の場合とほぼ同程度の時間で入力を行えるようにした。また、業務間（特に受入業務との間）でのデータを共有することにより、データの転記ミスから誤ったデータが作成される可能性が極力排除されるようになっている。

クライアントOSにWindows95を採用したことでインターネットの利便性を活用できる。GUI環境の特性を生かした効率的テキスト編集、電子化された各種カタログリング・マニユ

アルや目録規則、webベースの海外の国立図書館・大学図書館等のOPAC等をブラウザで同時参照しながら目録業務が行えるようになり、カタログリングの効率が大幅にアップした。同時に、全学60余の図書館・室の円滑な連絡・調整等のために、目録業務担当者のメーリングリストを設置し、目録業務用webサイトを開設するなど担当者間での情報交換を促進するための工夫もこらしている。

最後に、今後予定される機能として多言語対応がある。2000年1月より、NACISIS-CAT2はデータベースでISO/IEC10646 UCSを採用しマルチバイト文字を統一的に扱える環境を整備する予定になっているが、これに合わせて、中国・韓国・朝鮮語資料等の入力を行える環境の準備も現在進められている。

以上が、新しい目録業務システムの特色となっている。

（あかい のりあき：目録システムWG
附属図書館情報管理課目録掛）

iLiswave閲覧システムについて

蒲 彰 子

閲覧システムというと、図書館関係者以外の方は、資料を見る際の何か画期的な方法かと期待されるかもしれませんが、ここでは、閲覧に供する資料をコンピュータを利用して貸出・返却する仕組みのことを指します。

本を貸してもらおうとカウンターにやってきて、図書館員に学生証と本を差し出すと、一瞬気まずい沈黙があり、「延滞している本がありますね。ペナルティーがついていて新たに本は借りられません」と言われてギクッとしたことはありませんか？そんなことがたちまちわかってしまうのも、閲覧システムが導入されているからなのです。

このシステムでは学生証についている図書館利用証のID番号を読み取ると、借りている本の一覧（期限日等も含む）が表示され、本につ

いているバーコードラベルをスキャンすれば、通常ほんの数秒で貸出・返却手続きが済んでしまいます。コンピュータ・ネットワークの障害時にも、オフラインで処理できるようになっており、図書館員をパニックから救っています。

なかなか本を返却してくれない利用者のリストもたちどころに作成され、さらに督促用のハガキも印刷されます。一方、その本をずっと前から予約して待っている利用者には、貸出可能になったことを知らせる予約棚リストが役に立ちます。

利用者の中には、個人情報も一覽できてしまうシステムは問題があるのではないかと懸念される方もあるかもしれませんが、しかし、この閲覧業務用端末はカウンターの中にあり図書館員以外が操作することはありません。教室図書

室によっては利用者自身が利用証や図書のバーコードをスキャンして借りるようになっているところもありますが、その場合は個人情報の画面は表示されないように設定してありますのでご安心ください。

このように、iLiswave（富士通の図書館総合システム）のなかでもOPACと並んで利用者身近な位置にある閲覧システムですが、蔵書点検という機能についてもご紹介しましょう。去年の8月、附属図書館では開架図書の一斉点検を実施しました。これは、携帯用の端末4台で開架書架に並んでいる図書を全てスキャンし、登録してある開架図書の所蔵データと照合するというものです。結果は開架図書の約1.5パーセントが不明。不明図書の割合があきらかに高い分野もあり、今後どのように対処すればよいのか頭の痛い問題です。

ところで私は今年の1月に附属図書館から北部構内の基礎物理学研究所図書室に異動になり、カウンターで接する利用者の数やキャラクターという点では大きく変わりました。たとえば附属図書館は学部学生の利用が圧倒的に多く1日平均405冊（平成10年度）もの貸出があります。基礎研の貸出冊数は1日平均6冊（平成

10年度）雑誌の利用が中心の研究所図書室です。このように各図書室の性格を数字で表す、貸出冊数やその他の統計が、各端末ですぐにわかるというのもこのシステムの特徴のひとつです。

図書館が電子図書館としての機能を一層深め、一方きびしい人員削減が行われるなかで、おそらく百年前に京大図書館が誕生した当初からあったと思われる対面閲覧業務は、まさに消えゆく運命にあるのかもしれませんが。iLiswaveの閲覧システムでも自動貸出装置との連携がうたわれており、実際導入の動きが具体化している部局もあります。しかし、有人の閲覧カウンターが果たしている機能は、単なる機械に置き換えられる貸出・返却処理だけなのでしょう。電子化が高らかに叫ばれるなかで、利用者の小さなつぶやき声や生の表情を、微力ながらサービスに反映できる窓の存在はなおざりにされてはならないと思います。利用者の動向を感知しそれを業務に生かしていく、触角を備えた図書館システムこそこれから求められるのではないのでしょうか。

（かば あきこ：閲覧システムWG

基礎物理学研究所図書室）

新ILLシステムについて

児玉優子

1. はじめに

探していた本や雑誌が図書館の本棚にないとき、または、OPACで検索しても見つからないとき、あなたはそこで諦めていませんか。学内にない資料でも、図書館を通じて他大学からコピーや貸出で入手することができます。これが、図書館間の「相互利用サービス」すなわち「ILL (Inter Library Loan)」です。

ILLには 複写申込、現物貸借申込、複写受付、現物貸借受付の4つの業務があり、具体的には所蔵館を調べたり、所蔵館に申し込んだり、他大学からの申し込みに対してコピー

を取って送ったり、料金をやり取りするなどの作業があります。現在は、学術情報センター（NACSIS）のNACSIS-ILLシステムを中心にオンラインで業務を行っています。

2. リプレースによる変化

昨年（1998年）1月から京都大学の図書館システムのリプレースが順次行われ、ILLワーキンググループで検討してきた新ILLシステムも、同年4月14日に本稼動しました。

このリプレースによって変化したことは、まず、ILLレコードを蓄積できるようになったことです。このことによって、どの雑誌の複写を